瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 5
瑠璃集 …… 11
瑪瑙集 …… 22
紅玉集 …… 24
俳誌交歓 …… 25
１月号月評 …… 26
総合誌の窓 …… 28
恵贈句集拝見 …… 30
他誌転載 …… 32
特別作品「花火」及び鑑賞 …… 34
琥珀集作品鑑賞 …… 36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 37
Ⅱ …… 38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 39
妣の国父の蒼天（10） …… 42
義仲寺吟行記 …… 44

2010/1　第46号

今月の一句

雪の日の浴身一指一趾愛し　橋本多佳子

杉田久女の指導で作句を始め、その後山口誓子に師事する。昭和四十年に発刊された句集「命終」に処収され辞世句とも言われている。雪の日の冷えた体を湯に温める。手の指、足の指一本ずつを丹念にもみほぐしながら、自分の限られた命を愛しむ作者の姿がみえる。それは静かに命終を迎える作者の一瞬の安らぎの刻であったのかも知れない。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

極楽鳥となる

塩路隆子

諭されて尼寺に棲みつく貉かな

若者の匂ひなりけりセロリ噛む

昭和史を至極大事に枯野行く

切干のしなり確かめ峡暮らし

入日まみれ湖に大輪スワンかな

ままごとの高額紙幣柿紅葉

ポインセチア夜は極楽鳥となり

PDF= 俳誌の salon

一月号光耀抄

塩路　隆子選

小春日や牛乳箱の木のぬくみ　石川かおり
大輪を閲兵ここち菊花展　和田　郁子
ピサの斜塔作りて古書肆秋灯下　阪本　哲弘
見えざれど鳥声清し狭霧立ち　大松　一枝
無農薬たった一つの柿もらふ　鷲見多依子
とっくりを並べしは父温め酒　能勢　栄子
紀の山も灘も隠して秋霞　坂根　宏子
神官の嚔神燈揺らしけり　五十嵐　勉
薔薇の香の石鹸おろす秋の夜　小澤　菜美
後の月父母在さぬ身を慰める　竹内　悦子
勢子の追ふ鹿の逃げ込む神の杜　山口キミコ
野鳥には野鳥の序あり残り柿　落合　晃
よくしゃべる媼の姉妹木の実酒　和田森早苗
リメイクの小津の映画や秋日和　増田　一代
冴え渡る神の守りの白狐　松田　和子
流星の億光年を見届ける　三川美代子
鶏頭花その一本はパリジェンヌ　宮崎左智子

PDF= 俳誌の salon

横たはる娼婦にも見え黒葡萄　宮田　香

抽斗に拾ひ集めし柿落葉　安本　恵子

覗き見る地下のマグマよ冬紅葉　日山　輝喜

目鼻なき姉様人形一葉忌　藤見佳楠子

温泉の町の街道狭し野菊咲き　中川すみ子

毒茸神域に生ふ疎外感　北尾　章郎

紅葉湯のほてりなほあり目張り鮨　鈴木　照子

信濃路や一茶自慢の蕎麦を刈り　田下　宮子

熊野路のかがやく海や秋刀魚鮨　坂上　香菜

転作の自慢話や蓮根掘る　小林　成子

鳴猛る痛いの痛いの飛んで行け　森下　康子

ふと触れし柱冷たき夜長月　杉本　綾

人を恋ふななかまどの実旅われに　川崎　利子

もつれつつ離れつ秋の番蝶　高谷　栄一

秋日沁むロシア公子の遭難址　田中　芳夫

見えぬもの耳より入り湯冷めかな　常田　創

労わりて無為の勤労感謝の日　笠井　清佑

格子戸に風あそびをり冬日影　片岡久美子

放鳥の朱鷺秋天に羽搏けり　桂　敦子

PDF= 俳誌の salon

秋晴やローカル線に飛び乗りて　北田　敏子
枯蓮銃を構へし兵のごと　紀川　和子
白川女頭上に秋の花づくし　小林　久子
縁者なき土地に三十年秋刀魚焼く　小西　和子
腕に巻く時計ひんやり今朝の秋　青山　正英
冷まじや出土石棺朱ののこり　伊東　和子
冬したく知床旅情口ずさみ　伊藤　憲子
蕎麦掻きに戦時の記憶甦り　宇治　重郎
虫の音をかすかに聞きつ読書かな　宇治原弥幸
櫓の軋み水際の鹿に見送られ　山本　信子
里帰り母とふたりの菊日和　山本　節子
垂乳根の母に湯冷めのなかりけり　吉田　希望
母連れてモノクロ映画一葉忌　前川ユキ子
ビロードの夜会服めき鶏頭花　松岡　和子
冬林檎剥きつ頷く聞き上手　松田　洋子
豊穣の恩恵に謝し秋日和　秦　和子
触れて見る大黒柱里の秋　藤本　秀機
帰り来ぬ猫を待ちわび秋の暮れ　北條　清子
秋高し露座の大仏柔和なる　西垣　順子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

木のぬくみ　石川かおり

初めての佛事に慣れず秋の蝶
花八っ手厨の窓に映ゆる影
小春日や牛乳箱の木のぬくみ
山の錦広沢池ににじみをり
御所公開黄金に揺るる金鈴子
昼下り淡きに浮かぶ冬の虹
コンサートの余韻語らふ冬銀河

青不動　和田　郁子

大輪を閲兵ここち菊花展
秋うらら天地を睨む青不動
火焔負ふ青き不動や鵙猛り
公園は自由の広場色鳥来
門跡の庭寂び寂びと萩の花
急ぐなよ紅葉の彩を尽すまで
ブティックにしばし立ち寄る秋時雨

ピサの斜塔　阪本　哲弘

ピサの斜塔作りて古書肆秋灯下
深秋の身離れのよき肴かな
赤とんぼ盲導犬の視野にあり
纏まらぬ句集の想や秋灯
秋夕焼遠忌の膳を囲みたる
老よりも子が大事とや冬近き
冷まじや柩に添ふる舞扇

PDF= 俳誌の salon

行く秋

大松　一枝

朝日いま燃えつつ昇る紅葉渓
白粉の咲きて明るし雨の宵
見えざれど鳥声清し狭霧立ち
道草の苦き思ひ出ゐのこづち
束の間の語らひの宿秋惜しみ
風の夜を追はるる如く障子貼る
行く秋の日射しの中に黙ふたり

命の泉

鷲見多依子

何かしら人の恋しき秋の暮
通り雨変はりやすきは秋の空
無農薬たった一つの柿もらふ
そぞろ寒ニッキの甘さ香ばしく
胸を打つラジオ流れる里の秋
まんまるにこぼれ落ちさう秋の月
ガムかめば命の泉秋深し

箱根の夜

能勢　栄子

秋冨士へしつらへられし指定席
天高し子等に招かれ喜寿の宴
もみづれる箱根の山を見て飽かず
とっくりを並べしは父温め酒
父のことあれこれ憶ひとろろ汁
何処からかふるさと唱ふ声夜長
夜の秋強く生きよと諭さるる

大台ヶ原

坂根　宏子

紀の山も灘も隠して秋霞
山頂は五葉つつじの紅葉かな
白骨の如き木立の秋思かな
笹原と鹿の迫遥秋日和
吊り橋の短きに揺れなかまど
紅葉映ゆ煉瓦古びし水路閣
子ら遊ぶインクラインや赤まんま

PDF= 俳誌の salon

老松の膚

塩路　五郎

甦へる丹波の記憶牡丹鍋
電波時計狂ふ一瞬冬の雷
おほてらの日暮の静寂石蕗の花
日溜りの落葉を散らす路地の風
末枯れて老松の膚荒れ侘し
冬うらら仮名しなやかに万葉碑
木枯が吹きて一村リフレッシュ

嘘

五十嵐　勉

尼さまの経に傾げる芙蓉かな
木犀の匂ふ座敷やあぶり餅
千年の秋の井水や昼暗き
児も正座秋の古本供養かな
神殿に嘘の一つひびきけり
神官の嘘神燈揺らしけり
清水焼につまめば温き亥の子餅

ゴーギャンの女

小澤　菜美

柳散る天領の町ひと日旅
ゴーギャンの女憩へり秋日和
町の温泉の幟はたはた冬に入る
蔦紅葉拾ひ吉備路の旅鞄
侘びしさに踏めるどんぐり峡育ち
秋燕に托したき悔二つ三つ
薔薇の香の石鹸おろす秋の夜

秋日射す

竹内　悦子

後の月父母在さぬ身を慰める
パソコンのレシピのままに茸飯
袴着よりアンパンマンの服が好き
秋日射す古井戸しかとよしず蓋（義仲寺）
人まばら釣瓶落しの港町
出番なき消防艇や秋日和
流感の警報にママ過敏症

PDF= 俳誌の salon

奈良の秋

山口キミコ

勢子並び受くる角切り神事かな
鹿苑に角伐り神事朗々と
勢子の追ふ鹿の逃げ込む神の杜
囚はれの身となり角を伐られけり
角鹿を追ひ込む勢子の息荒し
鹿を追ふ勢子の鉢巻凛々しかり
万葉へタイムスリップ奈良の秋

柿

落合　晃

柿熟れて触れんばかりや納屋の屋根
天辺は野鳥のものに庭の柿
柿挽ぎに来よと文書く雨の窓
納屋の樋一夜で埋めし柿落葉
野鳥には野鳥の序あり残り柿
ひと竿の干柿軒に鄙に老ふ
有限と思へば軽し柿落葉

むかご飯

和田森早苗

陽だまりに陽だまりにをり赤とんぼ
頬張りて嫁に来る娘とむかご飯
秋の暮耳札着けて牛戻る
よくしゃべる媼の姉妹木の実酒
留袖の歩幅小さき今朝の冬
花嫁の涙キラリと冬日和
一泊の旅に出る日の初しぐれ

風禍痕

増田　一代

リメイクの小津の映画や秋日和
満月の出にほの白き三上山
籠に盛るわけあり林檎風禍痕
流れ星一つが消えて又一つ
冬支度あれこれ母を見舞ひけり
朝露の単線白き穂高駅
曇り窓北アルプスは霧の中

PDF= 俳誌の salon

お稲荷さん

松田　和子

深秋や「おもかる石」を試し持ち
願掛けの千本鳥居秋暮るる
晩秋の燈の千段稲荷山
冴え渡る神の守りの白狐
紅葉道色を連らねて朱の鳥居
二千もの楓の海や東福寺
消毒とマスク対策夜の授業

流星

三川美代子

流星にたった一つの願ひ事
野の風が猫を誘へりねこじゃらし
天高し若草山を喘ぎつつ
夕照りの東大寺道柿熟るる
愛嬌のダルマシリーズ秋灯下（絵本）
夕映の黄落馳せるツーリング
流星の億光年を見届ける

パリジェンヌ

宮崎左智子

杵兎月に残して児の帰る
鶏頭花その一本はパリジェンヌ
残る葉に透ける夕日や末枯れて
風鳴りやまだ口にせぬきりたんぽ
自由とやこの大空を鳥渡る
右肩を下げるは父似七五三
虫を売る弘法さんに背を向けて

新米

宮田　香

木犀の大樹や影の黄金色
新米を炊いて健やかなる朝
横たはる娼婦にも見え黒葡萄
勝利せし騎手の投げキス菊花賞
蔓たぐり終の一撃小さき棘
自転車のブレーキ固し霜の朝
畳屋の香り懐かし秋澄みて

PDF= 俳誌の salon

一月号月評

塩路　隆子

小春日や牛乳箱の木のぬくみ　　石川かおり

最近見かける牛乳箱はプラスチックのものが多いが、作者は久しぶりに、木で作った牛乳箱を見つけられ、その木の箱の暖かさに感動を覚えられた句である。子育てのころ、幼児の最初に持たせる玩具は木製の物にしたいと家計のやりくりの中から探し求めた記憶がある。それ程に木には暖かさがあり、感触のいいものがある。こう言った原体験を持つ作者であればなお更「木の牛乳箱」の温かさに感動を覚えられたに違いない。良い作品である。

大輪を閲兵ここち菊花展　　和田　郁子

閲兵といえば軍隊を整列させて検閲することである。菊花展に行かれた作者は、見事に咲かせた大輪の菊の前を一鉢一鉢丹念に見ながら過ぎて行く。その様子はまるで軍隊を閲兵している心地がしたと言う。作者は勿論戦争を知らない世代に育っている。しかしその様子をうまく「閲兵ここち」と詠まれたものである。大輪の菊は緊張のあまり「捧げ銃」をしているかに見えたのであろう。大人しい作者であるが、その大胆な表現に感心した。

ピサの斜塔作りて古書肆秋灯下　　阪本　哲弘

古書肆の風景をうまく切取っている。入荷した古書が決して真っ直ぐには積みあがらないのは当然のことであるがそれを「ピサの斜塔」と表現された面白さ、しかも断定されているのが迫力である。確たる信念を持ち重厚な句をてがけられるのが得意な作者である。この句の素材の古さが「ピサの斜塔」で近代的な句にうまく仕上がっているのに注目した。作者は来春早々に第一句集を上梓される。どうか祝福と共に今から出来上るのを楽しみにして頂きたいと思う。

見えざれど鳥声清し狭霧立ち　　大松　一枝

作者は以前短歌を嗜んでおられたかに聞いているが、俳句歴は短いようである。しかし最近特にしっかりと基礎の上に出来上った句を作られている。掲句も狭霧の立つ中、姿は見えないけれども鳥の清らかな、澄み切った声が聞えてくると言う構図のいい句を仕上げておられる。見えない鳥の声が聞えて来るようである。

以下略

PDF= 俳誌の salon